

## 中学生の語彙指導に関する実証的研究

### ーコーパスを活用してー

佐藤 剛 大鰐町立大鰐中学校

#### 要旨

本研究は、H14年度版中学校検定教科書、H18年度版中学校検定教科書、青森県高校入試問題(平成18年~平成13年)98996語からなる教材コーパスを語彙数・語彙リスト・リーダビリティ・コロケーションなどの観点から分析することで、初級学習者の語彙指導における基礎・基本を明らかにし、中学生への語彙指導のあり方を模索する。

その結果、出現頻度の上位は、be動詞、冠詞、代名詞が占めること、高頻度の一般動詞はhave, like, go, see, play, look, want, get, take, comeなど、BNCを分析した際と同様な結果が見られること。そして、動詞のコロケーション分析ではネイティブの英語と類似した使用をされている動詞と、教科書独特の使い方をされる動詞に分かれることが明らかになった。

【キーワード】語彙指導 コーパス 教材分析 中学生

#### 1. はじめに

コーパスとは実際に使用された言語テキストを大量に収集したもので語彙研究では最近多くの研究で用いられている(Collection of written and spoken material)。コーパスを使用することによって、さまざまな言語統計(頻度と分布)、単語や句の用例、分野ごとの言語使用状況、規則性、単語・品詞連鎖の頻度情報が得ることができる。

近年コンピュータにより大規模なコーパスの構築と分析が可能となり、「言語教育」への応用、辞書編纂や、教材開発への応用も活発に行われている。さらに初級学習者を対象としたコーパス研究も徐々に行われつつある。外国語教育において、実践的な語彙指導の研究対象となってきた。

週3時間という限られた時間の中で、語彙の使用頻度、重要度等により指導する語彙の重み付けが求められる。教科書や青森県の入試、英検、問題集などをデータ化しコーパスとして蓄積しそれを分析することで、生徒に求められる語彙の基礎・基礎基本とは何であるかを明確化する。

#### 2. リサーチクエスチョン

- (1) 中学生段階ではどの語彙を指導すべきか。
- (2) 中学生段階ではどのように語彙を指導し定着させるべきか。

#### 3. 研究方法

以下の教材をスキャナーで取り込みデータ化した。分析対象は本文とし、文法のまとめや内容確認のQ&Aなどは除外した。その後、コンコーダンス(TXTANA)で語彙数・Readability(Flesch-Kincaid Grade Level)・語彙リスト・コロケーションな

どの観点から分析する。

平成14年度版検定教科書6社・平成18年度版検定教科書6社・青森県高校入試問題（平成18年～平成13年）

## 4. 結果

### 4. 1 コーパスの基本データ

今回構築されたコーパスの基本データは、Total Tokens: 98996 Total Types: 4765 Type-Token Ratio: 0.048133 Average Word Length: 3.79という結果が得られた。教科書では、Tokenが約5,000～9,000とやや幅が見られる。だが、Typeでは約1,200～1,500、Type/Token Ratioでは15%～25%と類似した傾向が見られる。また、Average Word lengthでも約3.5～4.0程度と同様の傾向が見られる。

入試問題についてはToken、900～1,300、Typeは250～400とやや開きがあるが、Type/Token Ratioでは25%～30%と類似した傾向が見られる。また、Average Word lengthでも3.8程度で平均的である。

Readability(Flesch-Kincaid Grade Level)は教科書・高校入試問題ともに1～2で一致している。中学校の教科書は、ネイティブスピーカーのレベルでいうと小学校1年生から2年生程度である事がわかる。また、高校入試問題は一般的に難しいと考えられる傾向にあるが、少なくとも語彙数や、文の長さ、読みやすさという観点からは教科書とあまり差がないことが分かる。つまり、しっかり教科書を指導できれば高校入試に十分対応できると考えられる。

### 4. 2 考察

これらの結果から教材という観点から中学生に求められる英語力の大きな枠組みを以下のように設定する事ができる。

#### ①Native SpeakerのGrade 1～Grade 2程度の英語力

近年盛んに行われている多読指導などで、オーセンティックな教材を選定する際の目安として活用できる値である。また中学を卒業した際にどれくらいの英語を使用できるのかという目安となる。

#### ②Type/Token Ratioでは15%～30%

これは、教科書に使用される語彙がどれだけ豊富であるかどうかを示すとともに、語の繰り返しの度合いを示すものである。『日本人1200人の英語スピーキングコーパス』は（株）アルクの協力を得てSST(Standard Speaking Test)をコーパス化したものである。投野(2004)はこのコーパスを分析し以下のような結果を得た。200語ごとにTTR: Type-Token Ratio（異なり語の総語数に占める割合）をとりその平均をとった標準TTR（Standard TTR）はレベル1は36.67%で、それから徐々に上がっていき、最後は50%プラトーとなる。つまりTTRが50%というのが上級者の使う語彙の豊富さのひとつの目安になる。つまり、上級者の発話する英語ほど教科書では多様な語彙が使用されていないということになる。しかし教材として教科書を見た際、語彙習得における繰り返しの重要性を考えた際には、Type/Token Ratioが15%～30%は、未習語の意味の推測に必要な文脈との割合が95%であることから、決して十分とは言えないであろう。つまり10語に3語、新出語彙が表れるということになる。そのため、生徒にとって重要と考えられる語彙は、授業中の音読の回数や書き取りの繰り返しの回数を増やすなどの工夫が必要である。

#### ③Average Sentence Lengthは3.5～4.0文程度を発話したり読む事ができる。

教科書にある長い文を音読したり、スピーチをする際に、どこで区切るべきか悩むことが多いが、3語から4語で区切るということがひとつの目安になる。

#### 4. 3 品詞別頻出語

H14年度検定教科書コーパス・H18年度検定教科書コーパス・高校入試問題コーパスの3種類から word list を作成し、使用頻度の高い順番に並び替える。その後、太田・日臺（2006）を参考に動詞、助動詞、形容詞、名詞を抽出する。これを essential vocabulary とする。これらの単語は中学生段階で、必須の語ということになり特に生徒に身に付けさせることが必要なものであるということになる。次に、品詞別（動詞／助動詞・形容詞・名詞）に使用頻度順の Word List を作成した。これらは教科書・高校入試問題に何度も現れる語彙であり、中学生が特に必要とする語彙と考えられる。

教科書のコーパスの頻度表から、動詞・助動詞の essential vocabulary を選出した結果、be 動詞 (is are was)・do・can・have・like・did・go・said・know・look・will thank・let・want・come という結果になった。

青森県入試問題も同様の動詞が抽出された。上位から be 動詞 (is was are were)・have do・did・can・go・will・said・like・see・get・make・want・talk・tell。このように動詞・助動詞についてはしっかり教科書を学習していれば高校入試に対応できるということ、また、以上に示した essential vocabulary は、中学生の段階でしっかり習得させるべき動詞ということと言える。

次に形容詞の essential vocabulary であるが、教科書では上位から many・good・all・some・great・more・last・beautiful・long・sure・old・next・big・any・interesting、入試問題では good・old・much・new・long・all・every・first・bad・many・right・enough・happy・hard・last という結果が得られた。これは内容語という形容詞の性質からであるということが推測される。つまり内容語は、機能語とは異なり文の内容や筆者の単語の選択に左右されるため、教科書の内容や、長文のテーマに左右されるため、動詞ほど共通した結果がえられなかったと推測できる。

名詞についても同様に、頻度順に教科書では people・school・time・day・English・Japan・lot・friend・world・mother・children・year・father・June・home、入試問題では、school・father・man・day・people・fishing・time・children・brother・home・town・year・English・bus・family となった。両者に差が見られる原因は形容詞と同様に内容語というトピックや筆者に大きく左右されるという名詞の語彙自体の性質によるものである。名詞に関してはこの性質が形容詞よりも顕著に表れていることが分かる。

以上のように、全体的に見ると、高校入試問題に使用される語彙は、長文や対話の話題に使用される語彙が大きく影響を受ける。特に名詞では必ずしも一般的とはいえない語 (Pharmacist：薬剤師) などが高頻度で出現している。

中学生の教材コーパスは、多くの先行研究と同様の傾向が見られる。投野(2004)によると、頻度第1位の単語は、the。頻度第1位の動詞は、Be 動詞 (2位 have、3位、do)。トップ10に来る単語で最も多い品詞は、前置詞 (of, in, to, for) である。というように同様の結果が得られている。教科書はよく、不自然な言いまわしがあるとか、温室の英語という批判を受ける事があるが、少なくとも語彙リストという観点からは自然な英語に近いものであるという事がいえる。

#### 4. 4 コロケーション分析

週3時間という授業時間で毎レッスン現れる新出単語の予習と習熟のための反復練習、さらには小テストと生徒は非常に忙しい環境に置かれている。ゆえに、指導する側としては、生徒にとって本当に必要な語彙を精選してメリハリのついた指導をしていくべきであろう。このような観点に立ったとき、上の Word List は語彙の精選にとって客観的な裏づ

けのひとつとなると考えられる。

また、Word List で、代名詞・動詞・冠詞の出現頻度が高かったことから以下のような理由と指導の方針が考えられる。つまり、投野（2004）が主張するように、これらは英語の枠を作る働きをするものであり、英語の骨格となるものであるからであると考えられる。名詞が Word List で上位に現れないのは、代名詞・動詞・冠詞に比べてはるかに多いバリエーションを持つためであると考えられる。

よって、英語を指導する際には、まず生徒にこの枠となるパターンをしっかり定着させる必要がある。その上で、名詞・形容詞など内容語の部分にたくさんの語彙を入れ、たくさん文を作らせるという指導が有効である。つまり動詞＋機能語からなる英文の骨格をしっかり習得させ、それに肉付けをしていくという指導方法が有効であろう。これは、かつて盛んに英語教育で行われた Pattern Practice と呼ばれるものである。近年のコミュニケーション型英語指導の流行にのまれて、あまり重要視されなくなったが、もう一度その効用を見直す必要がある。

それでは、一体教科書や入試問題に現れる英語の骨組みとは何であるのかが問題となってくる。そこで語彙リストから出現頻度上位 10 の一般動詞がどのような語彙とどのような関係で現れているのかを調査した。本コーパスの動詞出現頻度上位 10 は、have, like, go, see, play, look, want, get, take, come であった。また、それぞれの結びつきの強さを MI-score と t-score で統計的に表した。先行研究によると、MI-score＝「低頻度でも、意味的に興味深いコロケーション」、t-score＝「広く頻繁に使用されるコロケーション」を示す値である。計算式は MI-score は  $I = \log_2(X \text{ と } Y \text{ の共起の実測値} \div X \text{ と } Y \text{ の共起の期待値})$  であり t-score は  $t = (X \text{ と } Y \text{ の共起の実測値} - X \text{ と } Y \text{ の共起の期待値}) \div (X \text{ と } Y \text{ の共起の実測値の平方根})$  である。MI-score では 3 以上、t-score では 2 以上が一般的に有意水準とされている。ただし、動詞を中心に共起状況を調査するため、共起語の出現頻度は動詞の右側に現れた場合のみをカウントした。

#### ①have の出現状況

have は一般動詞の中でもっとも高頻度で出現する動詞(1210 件)であるが、使用状況を見てみるとほとんどが have＋名詞という形で現れており、他の一般動詞のように様々な文型で使用されるために、出現頻度が高いというものではない事が分かる。にもかかわらず have の出現頻度がこれほどまでに高いのは、have の後ろに続く名詞(名詞句)の多様さによるためであると考えられる。Have の後ろに現れる内容語として主なものは表 1 のとおりである。

表 1. “have”のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
CDs	46	31	5.78	*	5.47	*
time	331	27	2.74		4.42	*
dog	132	27	4.06	*	4.89	*
books	76	26	4.81	*	4.92	*
day	313	23	2.59		4.00	*
book	214	20	2.93		3.89	*
pet	16	16	6.35	*	3.95	*
dream	79	15	3.96	*	3.62	*
problem	52	15	4.56	*	3.71	*
friends	205	14	2.48		3.07	*

表のように、have は CD や book のような一般的な名詞以外にも, have a time や have a good day, have a problem, have a dream など抽象名詞とも多く使用されている事が分かる。この後にも

have a question, have an idea など多くの抽象名詞が続いている。この用法は一般

的にも多く用いられ、中には決まり文句、イディオムのような扱いをされるものもあるので、have+抽象名詞はしっかり指導すべきものであると考えられる。

## ②like の出現状況

表 2. "like"のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
to	3240	133	2.26		9.12	*
you	3725	88	1.46		5.97	*
do	1240	88	3.05	*	8.24	*
music	169	62	5.42	*	7.69	*
soccer	211	34	4.23	*	5.52	*
play	385	24	2.86		4.22	*
baseball	94	23	4.83	*	4.63	*
tennis	186	22	3.78	*	4.35	*
dogs	132	21	4.21	*	4.33	*
Japanese	265	21	3.20	*	4.09	*

like は 851 件使用されている高頻度の動詞であり、また生徒の自己表現でもっとも多く使用される語のひとつである。like も have と同様にほぼ like+目的語という形で現れているが、have と異なるのは、目的語の部分

に名詞だけでなく、to+不定詞の名詞用法や動名詞などの形で様々な動詞が続くことが like が使われている文の豊かさにつながり、また高頻度につながっている。

## ③go の出現状況

表 3. "go"のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
to	3240	264	3.94	*	15.19	*
park	157	32	5.26	*	5.51	*
there	649	28	3.02	*	4.64	*
with	560	28	3.23	*	4.73	*
school	474	28	3.47	*	4.82	*
back	160	23	4.76	*	4.62	*
in	2425	21	0.70		1.77	
out	112	17	4.84	*	3.98	*
home	187	17	4.10	*	3.88	*
straight	23	13	6.73	*	3.57	*

go はやはり、go+to+場所を表す名詞という形で現れる事が一番多い。この形をしっかりと生徒に定着させる事が重要であろう。Straight が 13 件あるのは道案内の決まり文句としてよく使用されるためであろう。

## ④see の出現状況

表 4. "see"のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
you	3725	131	3.02	*	10.04	*
then	238	26	4.66	*	4.90	*
there	649	21	2.90		3.97	*
soon	93	14	5.12	*	3.63	*
good	518	14	2.64		3.14	*
many	437	13	2.78		3.08	*
earth	54	11	5.55	*	3.25	*
tomorrow	90	11	4.82	*	3.20	*
and	1963	10	0.23		0.47	
all	434	10	2.41		2.57	*

see の出現頻度が多いのは、I see. See you soon. See you tomorrow. Let's see.など、会話表現によく用いられるためであろう。このような会話表現をしっかりと定着させたい。

## ⑤play の出現状況

表 5. "play" のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
tennis	186	95	6.76	*	9.66	*
soccer	211	83	6.39	*	9.00	*
in	2425	36	1.66		4.10	*
with	560	28	3.41	*	4.79	*
guitar	43	22	6.77	*	4.65	*
and	1963	21	1.19		2.57	*
piano	27	18	7.15	*	4.21	*
baseball	94	18	5.35	*	4.14	*
basketball	85	15	5.23	*	3.77	*
school	474	15	2.75		3.30	*

play は、予想通りスポーツや楽器などが目的語として続く形で多く使用されている。生徒にとっても部活は学校生活のなかで重要なポジションを占めるものであり、教科書でも多くのパターンで繰り返し使用されている事

が分かる。

また in, with などの前置詞が高頻度で出現している。このことは play は、単純に目的語をとっただけの形で使用されるだけではなくそのあと、play+名詞+with+名詞という形で一緒にした人を付け加えたり、play+名詞+in+名詞という形でどこでやったのか場所に関する情報を付け加えたりという形式で使用されることが多いという事がわかる。生徒に自己表現させる時は、このことを意識する事が必要であろう。

## ⑥look の出現状況

表 6. "look" のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
at	777	145	6.16	*	11.87	*
this	1404	62	4.08	*	7.41	*
picture	104	22	6.34	*	4.63	*
that	1069	16	2.52		3.30	*
those	58	13	6.43	*	3.56	*
these	147	12	4.97	*	3.35	*
there	649	9	2.41		2.44	*
and	1963	9	0.81		1.29	
all	434	9	2.99		2.62	*
boy	122	9	4.82	*	2.89	*

look は、258 件の使用が見られる。表 6 にも見られるように、look at+名詞という形で出現する事がもっとも多い。名詞の部分は picture が多く、その前に this, that, these, those などの指示代名詞を伴う形で出現する。これ

は、教科書で show and tell の活動が多く取り上げられていたり、3 人称単数を扱った内容の時に、家族の写真を提示するという形を取ることが多いためである。Picture のほかにも photo などが続く事が多いこともこのことを裏付けている。

また、look at +指示代名詞+名詞という形以外にも、look は Look!!「見て」というそのままの形で聞き手の注意をひきつける役目を果たす用法で使用されることも多い。例としては” Look! He can still run fast.” “Look! Her name is Chris Fisher.” などである。以上の 2 つが look がコーパスで出現するほとんどのパターンである。

⑦want の出現状況

表 7. "want" のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
to	3240	214	4.67	*	14.06	*
be	309	35	5.45	*	5.78	*
you	3725	31	1.69		3.84	*
go	526	21	3.95	*	4.29	*
do	1240	19	2.57		3.62	*
in	2425	17	1.44		2.60	*
this	1404	14	1.95		2.77	*
it	2656	13	0.92		1.70	
for	1128	11	1.91		2.44	*
how	641	9	2.44		2.45	*

want は to + 不定詞の形で使われる事がもっとも多い。表 7 を見ても to が圧倒的に多い。またその後続く動詞として be が多いのは将来の夢を英語でスピーチするという活動が多く教科書に取り入れられているため

であろう。また、出現頻度 3 位の you は、中学段階としては、高度だと思われる want + 目的語 + to + 不定詞という形が多く使用されているためである。これに関しては実際の英語の使用場面でも多く使われる表現であるのでしっかりと指導する必要があると考えられる。

⑧get の出現状況

表 8. "get" のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
up	269	67	6.76	*	8.11	*
at	777	52	4.86	*	6.96	*
to	3240	32	2.10		4.34	*
it	2656	21	1.78		3.25	*
water	119	14	5.67	*	3.67	*
from	515	11	3.21	*	2.96	*
food	104	11	5.52	*	3.24	*
and	1963	11	1.28		1.95	
early	26	11	7.52	*	3.30	*
home	187	8	4.22	*	2.68	*

表 8 から分かるように、get のほとんどは get up early「早く起きる」もしくは get up at + 時間という形で用いられる事が多い。It の出現頻度が多いのは、That's nice. Where did you get it?「それいいね。どこで手に入

れたの?」というような会話のパターンが多く見られるためである。しかし、get は take と同様、実際の使用場面では非常に多様な意味を持ち、また様々な文型で使われる動詞である。そのため、頻度が多いからといって、Get up を look at のように決まり文句として指導してしまうのは、中学 3 年間は問題ないにしても、生徒の卒業後を考えた際、非常に危険なことである。Get up はしっかりと指導し、運用まで習熟させることに異議は無いにしても up (の状態を) get (手に入れる) というコアの意味まで深めた状態で生徒に指導する事が必要である。

## ⑨take の出現状況

表 9. "take" のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
to	3240	37	2.31		4.86	*
it	2656	30	2.29		4.36	*
care	45	25	7.91	*	4.98	*
No.	1560	19	2.40		3.53	*
of	1334	17	2.47		3.38	*
you	3725	17	0.99		2.04	*
your	704	14	3.11	*	3.31	*
my	1085	14	2.49		3.07	*
me	689	14	3.14	*	3.32	*
in	2425	14	1.33		2.25	*

take は上に述べた get とは異なり、非常に多様な形式・意味で使用されている。MI-score であまり有意な値が出ていない事があることを証明している。Take の使用されている文型は以下のとおり。

- to の使用状況：take+人+to（人を～に連れて行く）How long does it take to 場所（～までどれくらい時間がかかりますか？）
  - it の使用状況：買い物の場面で I'll take it.（それをいただきます。）
  - Care の使用状況：Take care.（「じゃあね」という決まり文句として）
  - No.：道案内の場面で Take No. 3.（3 番のバスに乗ってください）
- このように多くの文型で使用されているため、中学生にとっては理解しにくい単語であるという事が考えられる。

## ⑩come の出現状況

表 10. "come" のコロケーション

共起する語	共起語の頻度	コロケーションの頻度	MI-score	有意差①	t-score	有意差②
to	51	3240	14.83	*	56.92	*
and	38	1963	14.53	*	44.30	*
in	29	2425	15.23	*	49.24	*
on	26	702	13.60	*	26.49	*
with	21	560	13.58	*	23.66	*
me	20	689	13.95	*	26.25	*
house	17	162	12.09	*	12.73	*
here	17	378	13.31	*	19.44	*
my	15	1085	15.02	*	32.94	*
back	11	160	12.70	*	12.65	*

come は come+to+場所という形で使用される事がもっとも多い。また、come and+動詞という形で「来てそして〇〇して」という用法も多い。例としては come and help me. Come and visit me in

Korea. Come and join us.などの用例が多く見られた。また、様々な前置詞とともに決まり文句的に使用される事が多いのも come の特徴である。Come on. Come in. Come with me.などが多い。

## 5. 結論

以上のような結果から、RQ（1）「中学生段階ではどの語彙を指導すべきか。」に対しては、頻度の上位は代名詞・冠詞・前置詞が独占すること、動詞の上位は have, like, go, see, play, look, want, get, take, come などであることが分かった。これは、先に述べたように BNC を分析した際と類似する傾向にある。また、4.3 に示した essential



vocabulary を語彙リストから精選したことで、習得すべき語彙を生徒に焦点化した形で指導することが可能であると考えられる。しかし、逆に考えるとこれらの語彙は生徒が繰り返し繰り返し触れることになる語彙である。そのため、生徒は其中で付随的に語彙を習得するとも考えられる。逆に本研究に使用したコーパスでは頻度は低いものの、ネイティブが頻繁に使う語彙、また生徒の自己表現には欠かせない語彙が存在する可能性もある。今後は BNC の語彙リストとの比較、また生徒の使用する英語をデータ化したコーパスを分析し比較していくことが必要であろう。

RQ (2) 「中学生段階ではどのように語彙を指導し定着させるべきか。」については語彙指導ではまず、生徒全体に以上骨格とも呼べる頻出のパターン (play であれば play + 名詞(スポーツ・学期)+in/with+名詞) をしっかり習熟させ、あとは上のパターンに生徒の実態や興味関心に応じて、様々な名詞や形容詞を導入していくという指導方法が考えられる。4. 4 では頻出の動詞上位 10 位について、この枠となる骨組みをコロケーション分析から導いた。これらのパターンは Teacher's talk や生徒との Q&A、小テストなど機会を見つけて生徒に提示し生徒が習得しやすいよう努める必要があるだろう。

ただし、注意しなくてはいけないのは get のように、高校や、実際の使用場面とのギャップである。教科書と入試問題をデータとして収拾した本コーパスでは get up が全出現頻度のほとんどを占めていたが、get は get + 名詞 + 動詞 (使役) get + 名詞 + 名詞、get + 名詞 + 補語 (Let's get the party started.) などのように非常に多様な文型で使われるはずである。そのため、生徒が卒業後も英語の使用に困らないような語彙指導を行う必要があると考えられる。

## 参考文献

- 和泉絵美・内元清貴・井佐原均 (2004)『日本人 1200 人の英語スキッキングコーパス』。アルク。
- 太田洋・日臺滋之 (2006)『英語が使える中学生 新しい語彙指導の形ー学習者コーパスを活用してー』中央美版。
- 小篠、松岡、本岡(2002)「英語教科書 *New National Readers, The Globe Readers, The Standard English Readers* の計量的分析研究」『日本英語教育史研究』第 17 号 pp.21-40.
- 齋藤俊雄・中村純作・赤野一郎(1998)『英語コーパス言語学』。研究社。
- 投野由紀夫。(2004).「コーパスを英語教育に活かす」. 英語授業研究学会・関東支部第 10 回秋季研究大会発表資料. 2003 年 11 月 23 日. 筑波大学附属駒場中・高等学校
- 中谷、金野ほか(2002)「高等学校「英語 I」教科書の分析研究」『比治山大学現代文化学部紀要』第 9 号 pp.125-39.
- マイケル・スタッブズ・南出康世・石川慎一郎訳(2006)『コーパス語彙意味論』。研究社
- 馬本(2006) 「英語教科書の計量的分析ー研究の歩みと教科書のこれから」『日本英語教育史研究』第 21 号 pp.65-75.
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫。(2003).『英語語彙の指導マニュアル』。大修館書店